

# 青草

伝造は湯から上がったって着物をきると机に向かった。明日は代数も英語もあつたが、体が疲れていて予習をする気にもなれなかつた。またすぐ寝てしまふ気にもなれなかつた。黙って机に肘をついて頬杖をしていると、何時もの湯から上がった時の気持とは凡そ正反對に、気が沈んで来るのであつた。伝造は今日上級生にすすめられて買って来た英習字用の先の細い柔らかいペンを筆入から出した。ペン軸にはめようとして、まだ湯でほてっている指先でつまむと、新しいペンは息でもかけたように曇つた。英習字帖を出してまだ書き込んでいない頁を開けて、新しいペンにインクが付きの悪いのを我慢しながら、帖面の上にゆっくりと書き込んで行つた。隣の部屋ではもうとうに寝ている祖父の鼾がきこえていた。祖父はこの頃少し耄けて来て、夕飯の前に自分でわかした風呂にさっさとはいつて、夕飯をすますとすぐ寝てしまふのであつた。爺のような細かい格子の障子の向うは電気を消してあつて暗かつたが、広い土間になつていた。伝造の家はもと油屋をやつていた。三年ばかり前の大戦後の株の変動で父親が失敗してからは、油屋を止めて父親は一人で東京へ行つた。母親のない伝造は、このがらんとした大きな家に祖父母と三人で住んでいるのであつた。伝造のいる部屋のうしろは障子をへだてて広い勝手の土間で、土間つづきに僅かの石の仕切りをして湯殿があつた。湯には祖母がはいつていた。

近所の駄菓子屋から大勢の人の踊りの掛け声と手拍子の音がした。今年の夏祭りは盛大にやろうと、大人達が先に立つて騒いでいた。この界限でも山車を一つ出そうと言うので、近所の若い者が音曲の出来る駄菓子屋の親父を師匠にして、十日に一度ぐらいずつ日を決めて、夜になると踊や囃子の稽古に集まるのであつた。遠くのその陽気な音をきいていると、伝造はこの家のがらんとしたのが、余計に淋しく陰気に思えるのだった。今更奉公人

達の大勢いた昔の賑やかなことを思い出すのではなかった。実を言うと尋常の話ではないが、二日前まで元気で働いてくれた女中のお里が、昨夜突然自殺してしまったからであつた。内密にしているので未だ近所の者は誰も知らなかつた。知つていれば近所の若い者達の踊の稽古もああ陽気に気軽には出来ないだろう。伝造は今年十五になつて中学二年だが、物心ついて辺りを見廻してみると世の中は判らないことだらけで、お里が突然死んでしまったのもそれであつた。伝造は手当たり次第に色々な本を読んでいた。それで悲しい恋の末に若い身を投げて死ぬ人があることぐらいはもう知つていたが、その法則をあてはめてみても、今までお里には全然そんな気配がなく、平常割合無口ではあつたが無愛想ではなくて、何時も微笑しているような明るい顔でよく働いてるところを見ると、何の屈託もない凡そ物思いなどはしたこともないような女に見えた。年は二十一で、伝造の祖母には気に入りだつた。伝造の眼には自殺する前のお里も何時もと少しも変わらなかつた。思い返して見ても、とくにその日にどんな顔をしていたか記憶がない程で、ただ藪から棒に突然死んでしまったと思うばかりであつた。自分などの思いもよらない物陰で恐ろしいことが進行している。それが大人の世界だろうかと思つたりした。

昨夜の夜中であつた。何も知らず眠つていた伝造は突然祖母に起された。

「伝造。伝造」

祖母は伝造の布団を引っ張つた。

「伝造。一寸起きとくれ」

「うん？」

伝造は半分眠った眼付のまま起き上がった。寝ぼけた眼にも確かにまだ朝でないことは判った。見ると祖母はきちんと着物をきて帯をしめ、これから何処かへ出掛けるような格好で、茶の間と伝造の寝ている三疊の間との間にある土間に立っていた。

「どうしたんだ？」

「お里が帰って来ないだよ」

「お里？何処へ行った？」

「夕飯がすんでからだに。姉さんとこへ来いと言われたから行って来るって言うので、出してやったが、行ったきりでまだ帰らないよ」

「姉って、あの新屋のお澄のところかい？」

「ああ。：その時、わしもなあ、暗くなったで明日にしたらどうだって言ったが、急なことですぐ帰るからって言うだよ。こんなに遅くなれば、いずれお澄のところへ泊ったずらと思うけえが、：：何だか心配になって来た」

「うん」

「ちよっくら新屋のお澄のどこまで行って見たいが、お前一緒に行ってくれないかえ」

「うん：：今何時だい」

「十二時がちつと過ぎた頃だ」

伝造は時刻をきくと吃驚してほんとうに眼がさめた。何時も早寝の祖母がこんな時間まで起きていたことや、その身支度や顔付や言葉から祖母の心配の深さだけは伝造にもよく判った。伝造は平常からこの家で働けるのは第一に自分だと思って、何か事があると他所の大人に負けまいとして緊張するのであったが、その緊張を呼び起こして慌てて寝巻をぬ

いだ。

「学校の服を着て行こうか」。

「ああ、それがええ」

伝造が仕度をしている間に祖母は提灯に火を入れた。

「お祖父さんはどうする」

「よく寝入っているよ。そのまんまにして行くだに」

二人は近所に気兼ねをしながらそつと表戸を開けて外へ出た。街灯もろくにない田舎町のことで外は真っ暗であった。風もなく静かな夜で、空は晴れているらしく一杯の星が間近く光っていた。二人は近所を離れるまで無言のまま急ぎ足で歩いた。

お里というのは伝造の家の呼び名で、本名はお杉と言った。実家は町から二里ばかりの山の麓にあった。この町の北の端の新屋というところに実姉のお澄が嫁に来ていて、お里はよくそこへ行った。お澄もまた伝造の家に入出した。伝造の家は町の南の端にあったので、新屋へ行くにはこの海岸沿いの細長い町を縦に抜けなければならなかった。伝造は提灯で祖母の足元を照らしながら歩いた。小さく急ぐ祖母の草履のひたひた言う音と伝造の靴音が、戸を下して暗く森とした道沿いの家にはね返って、他人の足音をきくように響いた。しばらく来て一つ目の橋を越えると、祖母は待ち構えていたように話し出した。

「お里は出る時、小さい包を持って行ったようだよ……その時はええ機嫌で、笑っていたっけが」

祖母は肥っていたので平常歩きつけない急ぎ足で歩くとたちまちせいせいと息を切らした。そして短い息の間から途切れ途切れに話した。

「だけえが……この間っから、あれが……何時もとはちっと違って、何だか気になる」

「違ってるって、どんな風に？」

祖母はその違っているのを口では言いえなかったのか黙っていたが、

「若い女が、黙って夜どこかへ泊るもんじやないなあ……お里はそんなことをする娘じやないし……そいだから余計気になる」

伝造は、夜はちゃんと家になければならないのは誰だってそうで、まして若い女なら尚更だと、ただ言葉だけでそう考えるのであった。

町のただ一つの郵便局のところまで来た。ここまで道は半分だった。郵便局はもう灯が消えて黒く静かになっていた。郵便局の四つ角から町一番の物持ちの邸の塀が長く続いていった。その片側は鯉節の工場の塀だった。二人はこの塀にはさまれた切通しのような道を通り抜けた。二番目の橋をこえると祖母は苦しそうに息をついて立止まった。提灯の光に腰を伸ばした祖母の蒼い顔と額ににじんだ汗が映った。

「お祖母さん」

「ああ？」

「ゆっくり行こうよ。そんなに急いだって仕様がないだろう。少し休んで行こうか」

「ああ」

祖母は大きな息をついて頷いた。しばらく息をついていたが祖母は不意に

「こうしては居られない」

と言ってまたせかせかと歩き出した。伝造は黙って傍について歩いた。早く歩くとじき

に疲れるので、気がつく度に困った様に顔を見合わせて微笑いながら足をゆるめたが、しばらくすると何時の間にかまた二人とも速くなってしまうのであった。大通りをずっと真っ直ぐに行つて、河の方へ曲るとお澄の夫婦の家があつた。そこへ来ると祖母は表戸を辺に遠慮しながら叩いた。長い間たつてやつと起きる音がして、つけた電灯の光が戸の隙間から漏れた。

「誰方ですか」

とお澄の声がした。祖母が返事をする、と、狼狽あわして棧を外す音がして、電灯の光を後に背負つたお澄が姿を見せた。お澄は祖母と伝造を見ると、

「まあ、御隠居さん」

と言つた。祖母がこの夜更けに来たと言うので、何か事の重大なのをすぐ知つたようであつた。吃驚して立っているお澄の頬の皴は後方の電灯の光で深く見えた。祖母が言つた。

「お里が、今夜来なかつたかえ」

「ええ、来ました」

「何時頃ここから帰つたえ？」

「九時頃です」

「まだうちへ帰らないだよ」

この一言でお澄には万事が判つたようだった。お澄は喉が詰まつたようになってしばらく返事も出来ずやつと胸を抑えながら、

「兎に角、御隠居さん、中へ」

と二人を入れて戸を閉めた。お澄の夫も驚いて起きて来た。祖母は、

「そいじゃあ、実家の方へ廻ったかねえ」

「さあ……」

とお澄は考えたが、

「いいえ、そんなことはないと思いますの。実は今日、少しあれに話があつて、呼んで話したのですが、……」

「実家へも廻らないとすると……」

顔を見合せてそのあとが続かなかつた。お澄の夫は、

「お澄、あの娘こがおいて行つた風呂敷包があつたなあ」

「ええ」

「持つて来て、開けて見る」

お澄は奥から小さい風呂敷包を持つて来て、震える手でほどいた。中から、買いたての紙につつんだ帯枕と少し汚れた足袋が一足、謎のように出て来た。お澄は涙を浮かべて、  
「どうしたことでしょう」

とおろおろとした。お澄の夫はじつと風呂敷の中を見つめていたが顔を上げて、

「御隠居さん、この夜更けに、ほんとにすみませんでした。有難う御座いました。これからこちらで手分けして探しますから、どうかお引きとりになつて、お休み願います」

「そうかえ。そうしておくれ」

「お送り出来なくてお気の毒ですが、私はこれから心当たりを廻りますから」

「なあに、わしの方は伝造がいるで、……でも、なあ」

と祖母は心残りのする顔付でしばらくの間は腰を上げることが出来なかつた。



家に戻ったのは三時近くだった。それからやっと一ねむりしたかと思う頃、伝造はまた祖母に起された。もう夜は明けていた。

「伝造。お里はやつぱりな」

「ええ？」

「ゆんべ汽車へ飛び込んで死んだよ」

「……」

「ゆんべの一時の貨物の急行だって言うだが、今、栗原さんが帰って来て、報せてくれた」  
栗原と言うのは、伝造の家の離れを借りている警部補だった。

「栗原さん夜勤だったのかい」

「ああ。そんな時、駅の人の報せで……」

「何処で飛び込んだ？」

「上田の踏切だって。栗原さんは孔齋先生を起して連れて行ったが、二人ともお里だって事はすぐわかったと」

「一時の貨物かい」

「ああ」

「それじゃ……僕達が出掛けた頃は、まだ……」

「生きていたよ。そうだよ」

祖母は頷くと涙をぼろぼろこぼした。伝造は言った。

「何故そんなことをしたんだろう」

「何故だか……お前に心当たりはないかえ」

「僕に？あるものか全然」

祖母は涙をぬぐった。

「でもなあ、伝造。ゆんべお澄のそこへ行ってよかったよ、お前。……それでなけりやあ、わし等もきつと何か言われるとこだよ」

「うん」

伝造は訳も判らず頷いた。伝造は胸の中で改めて、お里が死んだと呟いて見た。伝造はそれまでに一度轢死体を見たことがあった。しかし彼の心の中ではあの何時も機嫌のよかつたお里の顔と轢死体の無惨な有様とがどうしてもくっ付かなかつた。

馴れない祖母の用意してくれた不味い朝飯を食って伝造は鞆を肩にして学校へ行つた。夕方暗くなってから、眼を泣きはらしたお澄が裏からそつとはいつて来た。伝造達は丁度夕飯を終えたところであつた。お澄は祖母と庭に向つた奥の間の縁側の電灯もつけない暗いところで、ひそひそと話し合つた。お澄の家にあれからしばらくして警察から報せがあつた。それは医者の方孔齋先生も栗原警部補も個人的によくお里やお澄のことを知つていたのであつた。お澄は嫁に行く前は孔齋先生のところまで女中をしていた。孔齋先生が親切に言ってくれるのでお里の死骸は先生のところ運んで、こわれた手足は包帯でつつんだ。顔は不思議とかすり傷一つなかつた。親達は今日のお昼に死骸をとりに来たが、葬式は明後日急いでやってしまうつもりだ、とお澄は語つた。

「お里の荷物はどうするな？ 今夜持つて行くかえ」

「はい。沢山もないでしょうから戴いて行きます」

お里の使っている押入れがあつた。祖母とお澄とは押入れの開きをあけた。下の段の夜

具は伝造の家のもので、お里の持ち物は上の段にあった。柳行李が一つと風呂敷包が二つ、小さい玩具のような可愛らしい鏡台に白粉の瓶などがのせてあった。行李の上には真新しい白い半襟をつけた襦袢がきちんと畳んでのっていた。

「綺麗好きだよ、お里は。何時もこう片付いている」

「それはもう小さい時から、姉のわたしも見習いたいくらい……」

「綺麗ずきでよく働いてくれた、わしはこの上のぞみはなかっただに」

「あれもこない家はないと、いつも言っていました」

「でも、何だよ、お前……お前の前だが、お里も汽車に飛び込むなんて、あれらしくもない、親不孝をしてくれたもんだ」

祖母の言葉は少し強かった。

「御隠居さん」

お澄は急に泣き出した。

「お里を悪く言わないで下さい。わたしが悪いのです。わたしが……」

「どうかしたのかえ」

「ゆうべ、あれのお嫁の話で、いつもよりきつく言ったもんだから……」

「縁談てのは、あれかえ。本田の利吉のことかえ」

「お里が話しましたか」

「いいや。お里はなんにも話さないよ。ただ他所からちっと聞いたことがあったよ。どうしてそんなにあの利吉が嫌なのか判らないが……」

聞いているお澄は激しくしゃくり上げた。

「お前達の親も悪いよ。本人の子供の頃に、親達が勝手に約束したものを、無理無体に言  
つて、……でもなあ、死なんでもよさそうなものだ。死ぬくらいなら……わしにも相談し  
てもらいたかったにのぉ」

お里をととも気に入っていた祖母は、こう言つて膝をついた。二人は押入れの前にしゃがん  
だましましばらく泣いていた。伝造は後方にいたが、押入れに首を突っ込むようにして泣い  
ている二人の姿を、ぼんやりした気持ちでじつと眺めていた。やがてお澄は顔を拭くと、  
押入れにある風呂敷包や鏡台などを皆行李に入れてそれを背負つて、来た時と同じように  
そつと裏口から出て行つた。

踊の稽古の音はまだ続いていた。伝造は握つていたペンに変に力がはいらなくなったの  
でペンを置いて、しばらく指を動かした。そして手を机においてじつと遠くの踊の掛声を  
きいた。駄菓子屋の親父は例のように禿頭に赤い鉢巻をして、鐘や太鼓の代りにお好み焼  
きの板を叩いて踊の拍子をとっていることだろう。こんなことの好きな桶屋の由蔵や質屋  
の若い番頭などは、他の人の先に立って踊っていることだろう。ここにいてもその場の様  
子が眼にみえるようであつた。

お里はとくに美しい顔立ちの娘というのではなかつたが、綺麗ずきでいつも身なりをき  
ちんとして感じがよかつたので、眼をつけていた近所の若い者もないではなかつた。桶屋  
の一番上の弟子である由蔵がそうだった。冬の夜など伝造が一寸買物に外へ出ると由蔵  
が呼びとめて、

「伝造さん。甘酒のみに行かんか」

と言つてさそつた。そして薪屋の前の暗いところに荷を下ろしている甘酒屋へ行つて奢つた。熱い甘酒を一心に吹いている伝造を見ると全く子供に見えて口がきき易かつたのか、お里のことやその好きなものなどをいろいろきくので、伝造もやつと判るのであつた。質屋の若い番頭にもある晩駄菓子屋や射的場を連れられて廻つたことがあつた。そんな男達の気持はよく判つたが、しかし伝造はまだ一度も何かお里に手渡す物を預かつたことはなかつた。まだそこまでは行かなかつたのだらう。お里の方は淡白で、知っているのか知らないのか、近所の娘や女中達のように若い者のいる店の前を気をひくような格好で往来したりするようなことは決してなかつた。

由蔵は尺八が上手で、夜になると道具を片付けた仕事場で、よく近所の若い者や子供達にとりまかれて尺八を吹いていた。いつかも今夜のように伝造が机に向つていると由蔵の尺八がきこえて来た。次の間にはお里が祖母と並んで縫物を拵げていたが、

「伝造さんも、大きくなつたら何かおやりになる？」  
楽器のことだつた。

「ああ」

「尺八をおやりなさいな。わたし、尺八がすきだわ」

伝造は由蔵の尺八をじつときいていたが、

「尺八は嫌いだよ」

と言つた。

「じゃあ、伝造さんは矢つ張り、バイオリンだとかマンドリンだとか、あんなものですよ」

「ううん。ピアノがいいんだがなあ」

「まあ、ピアノ。大変だね」

無口なお里がこんな風に話をするようになったのは最近のことであった。そして口をきくとまるで女学生のようなきき方をして、祖母と並んでお針をしながらこんなことを言っているお里を見たら、知らない人は誰も女中とは思わなかったろう。

しかし働く方は人一倍まめだった。春の遠足のとき伝造は、学校の校庭五時集合とあるので、家を四時前に出なければならなかった。握飯は前夜に作ればいいと言ったが、お里はその朝作る方がいいと言ってどうしてもきかなかった。お里は二時半頃に起きて釜戸かまどの下に火をつけた。出来たての飯で、お里は熱がって時々手を離して振りながら握った。伝造の馴れない草鞋の紐の結び方までお里は傍から指図した。家を出た時はまだ真っ暗だった。二、三間行って振り返るとお里が雨戸を開けた口に立って見送っていた。しばらくしてまた振り返るとまだ立っているのが見えたので、伝造は少し驚いて立止まったほどであった。遠足の目的地は千五百米ばかりの山へ登るのであったが、谷川にそった険しい路を黙って登って行く時や頂上の寒い風の吹く草原に出た時などに、ふとお里の様子を思い出して、伝造は心の中に、お里は自分のような年の行かない者が真っ暗な道を独りで出て行くのを可哀想に思っで見送っていたのだろうと解釈した。そしてその気持ちは自分が平気でいるのとは少し離れすぎているように思えて、何だか笑ってやりたいような、矢っ張り女だなどと思いついて言っでやりたいような気持になるのであった。

お里が伝造の着物を作ってくれたことがあった。出来上がったのを伝造に着せてみて帯もしめさせた。お里は膝で立って伝造に近く寄ると、裾を引っ張ったり、しつけ糸をとっ

て口にくわえながら伝造の襟をあわせたりした。お里がすぐそばへよると、普通の女の人のように髪の毛の香はしないで、かすかな白粉の香と共にお里の胸の暖かな香がした。お里は少し斜視の眼で伝造を見上げながら、

「どう？」

ときいた。伝造にはいいのか悪いのか判らなかったので、ただ頷いた。お里は少し離れて、と見こう見していたが、

「いいでしょう」

と言った。そしてそこらに落ちた糸屑を拾いながら、

「伝造さんは、学校では大人しい方？」

「うん」

伝造は何故お里が急にそんなことを言うのだろうと思っていると、お里は笑いながら、

「そうでもないでしょ？」

「大人しい方だよ」

「そう」

「僕なんか問題じゃあないさ。ひどいのがいるんだよ。もうこっそり煙草のんでる奴がいるんだ」

「まあ！ そんな年で！」

とお里は驚いた。

「不良少年ね。もっと大きくなって、二十になったって、検査前にのんだりしたら、罰金よ」

とまるで伝造がのんだかのような顔付をして睨んだ。

こんなお里が不意に自殺するなど言うことは、他の人達がどう言おうと、伝造のこれまでの頭ではどう考えても道理に合わないことに思われた。しかもこの理屈に合わないことがほんとの世の中のことだとすると、彼は自分の考えをどうまとめたいか判らなかつた。大人の世界へはいることはそんな不合理を呑み込むことなのだろうか。そう言う世の中のことか事実とか言われるそんなものを平気で辿たどって行かれる気持ちは、伝造にはまだ耐えられなかつたし、また判りもしなかつた。昨夜のお澄の話でもそうであつた。お里は九時頃お澄のところを出たと言う。九時から貨物急行の通る一時までは、ずい分と時間があるが、お里はそれまで一体何処にいたのだろうか。誰か仲の良い友達でもいてそこへ行つたのだろうか。しかしそれだったら、きっとその友達に怪しまれるだろうし、訊ねられるだろうし、訊ねられてお里が打ち明けたらきつと止められるだろう。しかし事によつたら、そんな行く先もなく線路の傍の草の中で泣きながら待っていたのかも知れない。伝造はそう思うと、何故お里がそんなことをするかと思うよりも先に、ただ可哀想で堪らなくなつた。しかし一方またお里は涙などこぼさないでいたかも知れないと思ひ、よる夜中若い女が真つ暗な闇の草の中にじつと何時間もある有様のことを想像すると、とても恐ろしいことのように思われて来るのであつた。そしてそう言う風にして待っていた末にどんな気持ちになつたのか、それから先はもう判らなかつた。そこまで行くと、伝造のまだ伸び足りない想像や理屈や考えは、何か黒い壁のようなものに突き当たって他愛もなく押しつけられてしまふのであつた。



警部補の栗原が湯を貰いに来て祖母と話をする声でした。祖母は何時の間にか上がってしまったのだろう。駄菓子屋の踊の音も止んでいた。伝造は英習字を一頁書き上げるとインキの乾くのを待っているうちに、もうこれ以上書く気持がなくなってしまうと、頬杖をしたまま目の前に下した電灯をじっと眺めた。祖母は栗原と低い声で話した。栗原の妻もいるらしく、火を焚きつける音がした。栗原は洗う手を休めて、

「何しろ、私はここに住んでいるので、職業柄困ったです」

「ほんになあ」

「こちらには伝造さんもいるし」

「伝造え？ お里とかえ？ 伝造は子供だに」

「いや、それは……実際そうだというのは勿論ないですが。人の口ですよ。いらぬ弁解もしなければならん。名前が出るとうるさい」

「ほんに。そいでお里の体は……」

「何ですか」

「間違いでも……」

「いや。いや、そんなことはなかったです……うるさいと言うのはあつた時のことですがね……お澄さんが？ 嫁入りの話ですか？ そうですね……」

栗原は一寸黙っていたが、

「よくわからんですね……本当はお杉と言うのですね……明日は新聞に出るかも知れんですが、小さく出ますよ。名前が違っているし、この近所では余り気がつかないですんてしまうかも知れん……なにしろ、事がうるさくなって来ると、私の立場は全く困ったこ

とになるところだったですよ。よかったです」

伝造は眼をつむって、右の手で額を横に熱くなるほど強くこすった。眼がちかちかして、額をこする音と共に、大人の世界、大人の世界と言う、声だか文字だか光だか判らないものが頭の中をかすめて走って行った。英習字帖はまだ閉じずに拵げてあった。眼をあけると、電灯の下にひかっているその帳面の白さが眼一杯にはいつて来て、頭の中も胸の内もただ素っ気ない白っぽさばかりになった。その中に紙の上の横文字が水あめんぼのように浮いていた。そして不意にこんなものが自分と何の関係があるのか不思議で堪らなくなつた。こんな見たこともないような遠い国の言葉だとか、この頃はじめてばかりの判つたような判らないような公理だとか、大人達はそんなことをさんざやって、さんざやった揚句に大人になつたのだろうか、そういう何処へ行くのか判らないような大人になる道と、死ぬ間際まで微笑っていたお里の心の中が判ることと確かにつながっていると誰か固く受け合ってくれるのだろうか。伝造は帳面を片付けて頬杖をついた。湯殿では栗原が湯から上がる音がして、間もなく祖母も共に裏の家へ行ったらしかった。辺りはひっそりとなつた。ただ隣の部屋の祖父の躰だけが間をおいてかすかにしていた。部屋の中は戸外の生暖かい空気が忍び込んで来ているようにも、やり、として、伝造はこの生暖かい静かさが妙に頼りなく物悲しかった。

「よいやさ。それ、よいやさ……ドン……ドン……」

駄菓子屋の踊の掛け声と手拍子がまたはじまった。